

あんげろす

殺すな

永野茂洋

ベ平連が1967年4月3日のワシントンポストに出した反戦意見広告は、紙面の半分が岡本太郎筆で大きく「殺すな」と書かれた記事だった。数年前、その新聞の切り抜きを鶴見俊輔と長年親交のあった元岩国教会牧師で、その後神戸教会の牧師を長く務められた岩井健作牧師のご自宅で拝見した。



岩国教会の応接間に掲げてあったもので、染みで変色していたが、鋭い字体の3文字は見る者の胸を刺す切迫感があった。十戒の言葉を新聞一面に大きく印刷するという前代未聞の出来事だった。十戒の「殺すな」には「ラーツァー」という動詞が使われている。人間のみを目的語として使われる動詞で、対等で共同的な隣人関係を破壊する反人間的行為に対して使われる。旧約の民が捕囚後、国家生活の破滅と引き替えに人類に対して提出した天啓の戒めだった。旧約聖書と日本国憲法には相通するものがある。ベ平連の小田実にとっての「殺すな」も、アジアと世界に対する甚大な被害と苦痛、国家破綻を経験した日本が、戦後ようやく手にした日本国憲法をラディカルに読み込んだうえでの「殺すな」だった。今その言葉を日本でも少なくない人々がロシアに対して、ハマースとイスラエルに対して声にして突きつけている。「殺すな」が「背景や過去の文脈はともあれ、とにかく殺し合いはやめましょう」といった空虚な言葉として消費されないように、一語が持つその言葉固有の歴史と、それを超えて現在にまで響き合う重層的な意味の所在を研究し、保存し、伝えていくことはキリ研の大きな義務であり矜持であると思う。



ながの・しげひろ (所員)

第93号

2024年3月

研究の「新しさ」について

榎木 憲一郎

研究の「新しさ」とは何であろうか。もしくは研究における「新しい発見」とは何であろうか。研究者として出発してからこの問いについて自分は常に悩まされてきた。論文の発表や審査を受けるとき、この問いは常に問われることになるからである。

特に私の研究対象や研究方法がこのような「新しい発見」というものと相性が悪いところがある。私の研究対象は高校の世界史の教科書にも載っているドイツの哲学者ヨハン・ゴットリープ・フィヒテの政治思想であり、さらにそれを日本で積極的に受容した南原繁とその周囲の人々だからである——昨年の2023年12月下旬に京都大学学術出版会より、高校の世界史の教科書でおなじみのフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』の翻訳を『ドイツ国民への講話』という表題の下で出版したので興味のある方はご一読願いたい——。このことから分かる通り、私はフィヒテの政治思想そのものの研究も行っているが、それと同時にその受容や解釈の歴史についての研究をこれまでしてきたのである。

しかしこのような研究は、「地味である」とか前述したように「新しい発見は何なのか」、さらには「意味がない」といったコメントにさらされやすい。一般的にはどうしても先人の研究を批判的に乗り越えることが求められるからである。これに対して自分の研究は先人の研究の単なる紹介と見られがちである。さらに日本のフィヒテ政治思想研究者としては先人にあたる南原繁のフィヒテ研究を基本的には踏襲し、その意義をどのようにして現在の私達の問題意識と架橋させるかという点に自分の研究の中心的な課題がある。従ってどうしても「新しい発見」について問われたときに、「新しい発見というよりも、むしろ先人たちの研究の確認作業が中心の研究です」と答えがちになってしまう(そのため博士論文審査のときに、このような表現をするのを指導教員から禁じられてしま

った)。

もちろん、研究者生活を続けていくうちに、特に最近になって自分の研究に関しても、「新しい発見」というものが十分主張しうることもわかってきた。そもそも南原繁のフィヒテ政治思想研究のなるものが、実際にはほとんど一般には知られておらず、そのため、この南原のフィヒテ政治思想理解を参考にして、それを発展させた研究は十分に——その成果については前述した京都大学学術出版会より出版した『ドイツ国民への講話』で私がその大半を執筆した解説を読んでいただきたい——「新たな発見」を伴った研究として評価され得るものだったのである(実際博士論文審査が終わったあとで、審査に当たられたドイツ思想史の研究者の方からフィヒテのイメージが全く変わってしまったとのコメントを頂いた)。思い直せば、いわば自分の研究は、先行研究としては厳然と存在していたかもしれないが忘れ去られていったものの再発見であり、再評価なのであって、そこには十分「新しさ」や「オリジナリティ」が主張し得たのである。

結局のところ、完全に新しいものを生み出すことは、新しい資料を発見するといったことを除いては、人文社会科学の研究、とりわけ古典を扱う政治思想史研究ではまず不可能と言って良い。むしろ「新しさ」を過度に意識するあまり、先人の問題意識や研究成果を軽視することのほうが実りある成果に繋がらないのではないだろうか。また「新しい発見」がないことを理由として、ある研究分野が廃れていってしまうことも危惧すべきことである。そして何より一見「つまらない」ことや「面白みがない」ことが、必ずしも「無意味」とは限らないということを常に認識する必要があるように思われる。

一見地味に見えて面白みのない自他の研究であっても、おろそかにせず、敬意を払い、その内容を確認して主張すべきことは主張することの大切さを噛み締めながら、それを後進に伝えつつ、自身の研究を進めていきたいと改めて思う昨今である。

とちぎ・けんいちろう(客員研究員)

ピアノ

渡辺 祐子

「あんげろす」第 86 号（2022 年 1 月）で、所員の深谷先生がご自身のやり直しピアノについて書かれた巻頭言を楽しく拝読した。わたしも似たような経験をしているので、深谷先生に触発されてピアノについて書いてみたい。

わたしの家にピアノがやってきたのは、確かわたしが小学校 3 年生の時だった。家族 5 人の我が家は、福島県郡山市の地方銀行の社員寮に住んでいて、そのころわたしはヤマハの音楽教室に通わされていた。そこには母の意思が働いていたはずだが、歌もオルガンも大好きだったわたしは、教室通いを楽しみ、母がピアノが欲しいと父にせがみ出した時は、小躍りするほど嬉しくて、ピアノの到来を心待ちにするようになっていた。

ところが、アップライトとはいえかなり場所をとるピアノの購入に、父は猛反対だった。理由はピアノを置く場所がないだけではない。そもそも父は、ピアノなんざ金持ちの道楽で、弾けるようになっても何の役にも立たない、高価なピアノを買うより、カラーテレビを買った方がよほど「役に立つ」、そう信じて疑わないような人だったのである（うちのテレビは古い白黒だった）。父は娘の音楽教室通いにも関心を示していなかったのも、娘を上手なピアノ弾きにさせたいなどとはつゆほども思っていなかったのだろう。クラシック音楽好きでレコードもよくかけていた人だったが、父にとってピアノを買うことは、クラシック音楽を聴くこととは次元が違っていたようである。一方の母は、ピアノとカラーテレビを比較すること自体が気に入らず、父のそうした主張に激しく反発し、ピアノをめぐる攻防はしばらく続いた。

ある晩のこと、いつものようにピアノをねだる母に、父がいい加減にしると声を荒げると、母の目からみるみる涙がこぼれだし、側にいたわたしは、ピアノは諦めるほかないのかもしれないとただただ悲しかった。それか

らしばらく経って、わたしの淡い期待を打ち砕く出来事が起こった。ある日学校から帰宅すると、居間にカラーテレビが据えられていたのである。わたしはこれでピアノは来なくなったと思い込み、絶望のあまり母の前で声をあげて泣いた。

ところが、である。その直後わたしは、両親がピアノ騒動に終止符を打つべく互いに歩み寄って、「ピアノかカラーテレビか」ではなく、「ピアノもカラーテレビも」で手を打ったことを知るのである。それから間もなくピカピカに磨き上げられた本物の真っ黒なピアノがやってきた。

母はせっかく自宅でピアノの練習ができるようになったのだから、音楽教室ではなく個人レッスンがよいと、つてを頼って国立音大を卒業した先生を探し出し、わたしはグランドピアノがある先生のご自宅に通い始めた。東京とは違って、田舎でピアノの専門教育を受けた先生を探すのは当時それほど簡単ではなかったと思う。丸い眼鏡をかけたその先生は気さくでさっぱりしていた方だったが、練習を怠ると叱りつける怖い先生でもあった。ここでわたしはブルグミュラー、ツェルニーなど、ごく一般的なレッスンを受けた。相変わらず父は娘のピアノには関心がなく、娘が休日に練習するのを嫌がり、発表会にも決して来ようとしなかったが、レッスン代は父の給料から出ていたはずだから、まあ勝手にやれという心境になっていたのだろう。

母はいわゆる教育ママではなく、勉強についてはそこまでうるさく言わない人だったが、娘のピアノにここまで入れ込んだのは、母自身の少女時代の経験ゆえである。クラシックとは無縁の決して裕福とは言えない家庭に育った母は、日中全面戦争勃発の翌年に生まれ、小学校 1 年で敗戦を迎えた。戦後民主主義の洗礼を受けた世代である。戦後間もないころの音楽教育は、戦前とあまり変わらず歌唱中心だったようだが、1949 年ごろから各学校に木琴や鈴などの簡易楽器が備え付けられたり、GHQ の援助で蓄音器が支給されたりして、器楽演奏や音楽鑑賞

の環境が少しずつ整えられていったという。母はこうしてクラシック音楽に目覚め、特にピアノに強いあこがれを持つようになった。そのあこがれを娘を通して実現したかったのだろうと今になって思う。「高校の体育館に一台きりのピアノを弾くために順番待ちの長い列ができた。寒い時も手をこすりながら自分の番が回ってくるのをじっと待っていた。それぐらいピアノが弾きたかったのよ」これはわたしがピアノの練習をさぼると決まっていたと言われていた説教の一部である。そのあとには必ず「だからあなたは恵まれている。ちゃんと練習しなさい」が続いた。

小学校5年生で父の転勤で福島市に引っ越しをし、今度は桐朋学園大学卒の先生について。中学ぐらいまでは音楽の道に進むことも考えなくはなかったが、次第にその才能は自分にはなさそうだと気付くようになった。中学2年か3年の時、先生の強い勧めで、モーツァルトのソナタ（イ短調 K. 310）を課題曲とする検定試験のようなものを受けた。県立文化センターのホールの舞台上で10名ほどの審査委員の前で課題曲を演奏し合否が決まるという恐ろしい試験である。時には先生に叱られながら必死で練習して完全暗譜で臨んだ本番では、途中何度か躓いて弾き直しをする失態を演じてしまった。ギリギリで合格したものの、この経験は音大への進学という選択肢からわたしを遠ざける最初の出来事となった。

高校1年の終わりごろ、先生からピアノに加えてソルフェージュの教室にも通うよう勧められた。音楽大学を目指すならどうしても必要だという。音大を受験する見通しなど立てていなかったが、言われるがままにソルフェージュを始めた。ソルフェージュとは、音（和音）を聞き取り楽譜に正しく書く訓練で、一緒にクラスの生徒たちの中でわたしの成績はいつもビリに近く、数回通ううちにどんどん嫌いになり、こんな難行苦行を強いられるなら音大などごめんだと思うようになった。

決定的だったのは、ある日のレッスン室で見た光景である。その日は少し早めについたもので、前のレッスンを見学しながら待つことになったのだが、わたしより一つ

年下の生徒が、スクリャービンの難曲を情熱的にノーミスで弾く姿を目撃し衝撃を受けた。先生の指導も明らかにわたしに対するものとは異なっていた。そして音楽大学にはこういう人しか進学してはならないと悟ったのである。

高校2年生では、ショパンのポロネーズやベートーベンのソナタをレッスン曲として与えられ、それなりに楽しんで弾いていたが、いよいよ進路選択の時期が迫り、ついに先生に音大は受験しません、普通の大学を受けますとあって、わたしのピアノ教室通いが終わった。先生はわたしの決断に理解を示してくださり、「でもピアノは続けてね」とおっしゃった。

進学に伴い上京した後は、帰省時以外はピアノからはすっかり遠のき、教会でたまにオルガンを触るぐらいになってしまった。しかしピアノを弾き、しかも自分のピアノを持っている人と結婚してから、わたしのピアノ愛が復活して今に至る。ピアノは1日練習しないと1週間遅れるというのは本当で、学生時代にほとんど弾かなかったつげは大きく、かつて弾いていた曲の楽譜を見ると、フラットやシャープだらけで複雑な和声の曲を自分が弾いていたことが信じられないほどである。例の検定試験のソナタも、今では左手がついていけず、完全には弾けなくなってしまった。深谷所員は、やり直しピアノを「遺恨試合みたいなもん」と書いておられたが、その気持ち、痛いほどよくわかる。

けれども世の中には、少しだけ背伸びをすればわたしでも何とか弾ける美しい曲が山ほどある。今はそうした曲を弾きながら、バッハやモーツァルト、そして大好きなシューマンと時空を超えて会話をしているような妄想にふけるのである。父が言っていたように、ピアノなんか弾けたって確かに何の役にも立っていないが、それでもピアノに向かっているわたしは、多分優しい顔をしていると思う。

わたなべ・ゆうこ（所員）

田中 祐介

東京ステーションギャラリーで開催された特別展示企画「みちのく いとしい仏たち」（2023年12月2日から2024年2月12日まで）を会期終了間近に駆け込みで観ることができた。青森・岩手・秋田の三県にのこる木像の民間仏が約130点紹介される展示で、深く感銘を受けた。

中央で制作された仏像は概して荘厳であり、正しい図像を高い技術で再現する。江戸時代に中央から地方への仏像の販売流通が促進されると、新しい立派な本堂にはきらびやかで整った仏像が安置され、それまでの古い仏像は順次置き換えられていったという。この展示企画が取り扱うのは、地方仏師が造像し、村々でひっそりと人々の信仰を支えた特色ある仏像の数々である。

展示された多くの仏は笑みを湛えていた。如来や菩薩の場合、通例は厳しい表情か無表情がほとんどであるところ、民間仏は笑顔で信仰者に寄り添っているかのようである。展示解説では「泣いて怒って、生きるつらさをつぶやく人に「いいんだあ、いっぺ泣いでいけ」とニコニコ顔で語る仏像は宗教造形としてまちがっているでしょうか」（公式図録57頁）と問いかける。地方に運ばれた立派な仏の均整と荘厳は、中央の知と権威の体現としても見る者を圧倒したであろう。笑顔で祈りを受けとめる不均整な民間仏の存在は、信仰は誰のためにあるのかという問いに関して熟考を促すものであった。

展示の後半部では、代々長坂屋右衛門四郎を名乗る大工が紹介され、安永八（1779）年没の右衛門四郎の手による仏像や神像が展示される。民間仏の作者が知られるのは極めて稀で、多数が残っていることも奇跡であるという。

右衛門四郎の作で最も惹かれたのは、青岩寺（青森県七戸町）の地蔵菩薩立像群である。元々は上北四方一帯の民家に祀られていた像を、小館さんという方が一つづ

つ集めて寄進したのだという。個々の像の表情は様々であるが一律に合掌し、錫杖や宝珠は持たない。あえてそのような造形としたのは、まつる人々の追善供養の意図をそのまま反映させたためだと解釈されている（公式図録121頁）。

民家の一軒一軒に、合掌する小さな地蔵菩薩が大切に安置されている様子を想像する。追善供養による菩薩への祈りは、死者の冥福を祈る儀式であると同時に、死者の在りし日の記憶を辿り、思い出し、愛惜するひとときともなったことであろう。ひとりひとりの記憶という極めて個別的な次元において、祈りにより生者は死者に再会し、過去と現在は繋がりのある時間となる。死者に対する私的な祈りを通じて、文字記録によらない無数の小さな歴史が生まれ、意識された瞬間を思い描く。

以上はもちろん仏教に関わる信仰であるが、翻ってキリスト教に即して考える。図像の重視か排斥という宗派上の相違はあるとして、古今東西の様々なキリスト教の信仰の場で、信仰者に寄り添うような笑顔や、たとえ土着的でも家々での祈りを受けとめたモノはどのようにあり、人々の信仰を支えてきたのか。断片的な知識しかない私であるが、幸い当研究所には多様な専門の研究者が所属している。今後の研究所の活動を通じて、学び、教えていただく機会を楽しみにしたい。

たなか・ゆうすけ（主任）

研究所活動（2023年12月～2024年3月）

中国近現代キリスト教研究プロジェクト主催講演会

「現代中国キリスト教の現状と課題」

開催日時：2024年1月19日（金）14：00～17：00

開催場所：白金校舎1号館 1457教室

講師：宋軍（香港・中国神学研究院教授）

中国近現代キリスト教研究プロジェクト主催研究会

<第3回>

「中国西南部彝（イ）族地域におけるキリスト教の伝道史についての考察」

開催日時：2024年1月26日（金）19：00開始

開催形態：Zoomを用いてオンラインにて開催

報告者：徐亦猛氏（本研究所協力研究員）

キリスト教文学・音楽研究プロジェクト主催公開講演会

「バッハの演奏会場における建築の影響」

開催日時：2024年2月26日（月）19：00～21：00

開催場所：白金校舎 本館2階 1201教室

講師：アレクサンダー・グリヒトリーク氏

（ワイマール音楽大学教授）

司会・通訳：加藤拓未氏（本研究所協力研究員）

キリスト教文学・音楽研究プロジェクト主催研究会

「内村鑑三のキリスト教思想と再臨の風景

——生命の水の河の辺で」

開催日時：2024年3月5日（火）17：00～19：00

開催形態：Zoomを用いてオンラインにて開催

発表者：小林孝吉氏（文学評論家・本研究所協力研究員）

キリスト教研究所3月研究会

開催日時：2024年3月23日（土）14：00～17：15

開催方法：対面とオンラインのハイブリッド開催

（会場：白金校舎 本館4階 1455教室）

発表①

「メトロポリタン美術館クロイスターズ蔵《一角獣のタピスリー》—西洋中世末期のタピスリーにおける聖俗のあいまい」

発表者：高木麻紀子（所員）

コメンテーター：齊藤栄一（名誉所員）

鼎談企画

「キリスト教研究の行く末を考える」

登壇者：永野茂洋（所員）、渡辺祐子（所員）、久保田浩（所長）

新着図書

- ・「福音と世界」No. 1、新教出版社、2024。
- ・「福音と世界」No. 2、新教出版社、2024。
- ・「福音と世界」No. 3、新教出版社、2024。



MEMO

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第93号

2024年3月11日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37

TEL:03-5421-5210 / FAX:03-5421-5214

Email: kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩